（別紙様式＝小学校用）

都道府県番号	２４
都道府県名	三重県

【 ①□ ②□ ③☑ 】

Ⅰ 学校名及び規模

学校名	白山町立倭小学校								
学 年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	障害児学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	１３
児童数	１１	１３	１４	１５	３３	１６	0	１０２	

Ⅱ 研究の概要

１ 研究主題

「意欲的に学ぶ子どもの育成」 ～算数科を中心として～

２ 研究主題の設定の趣旨

昨年度から、「意欲的に学ぶ子どもの育成」という研修主題を掲げ、基礎学力の向上を図る指導法の工夫を中心に、学校教育目標「学び・学び合う倭の子」の育成をめざし取り組んできた。その結果、計算力の向上や落ち着いて読書ができる、上級生がいろいな活動で活躍するなどの成果をあげることができた。

しかし、まだ与えられた課題に取り組んでいく受身的な姿勢の児童も多く、主体的に自分で考え、自分で判断し、自ら学ぼうとする力や自己表現する力は、十分育っているとは言い難い。

そこで、基礎学力の向上を図る指導を工夫する中で、子どもの興味・関心を高める課題を設定し、基礎学力の向上を図る指導の工夫をすれば、子どもは、わかる喜びを味わい、意欲的に学ぶ力を身につけていくことができるのではないかと考え、この研究主題を設定した。

３ 研究内容・方法

本校では、昨年度同様、児童の課題を学力の実態をもとに次のように考えた。

・自ら進んで何事にも取り組め、課題を見つけること
・読み・書き・計算など根気よく繰り返して練習すること
・相手のことを考えて行動でき、活動の工夫ができること
・自分の考えや思いがいろいろな場で表現できること

以上の課題をふまえ、研究主題を「意欲的に学ぶ子どもの育成」とした。そして、児童につけたい学力を次のように考えた。

《学びの力》（基礎学力、考える力、学ぶ意欲）
・集中して読み・書き・計算するができ、生活に役立てることができる力
・自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する力

《学び合う力》（支え合う力、伝え合う力、活動への意欲）
・（低学年）集団の中で活動する力
（高学年）上級生として行事等の企画、運営のできる力
・想像力、創造力を働かせ、自己を表現する力

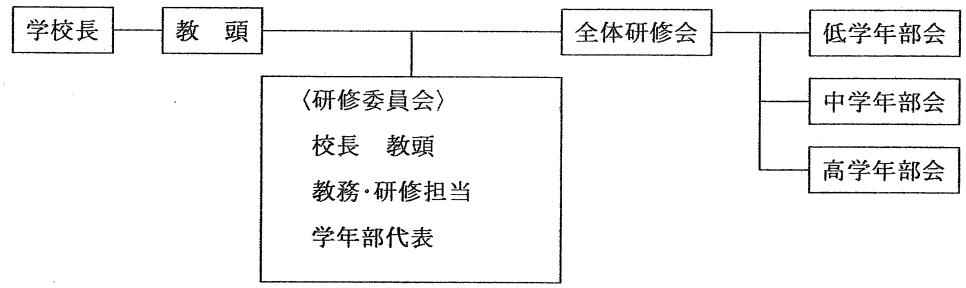
本年度は、読み・書き・計算を中心とした学力の定着に加え、児童が自ら考え、問題を解決していくには、どのような工夫を授業に加味してゆけばよいかを重点的に取り組んだ。

・計算の習熟と算数の指導
百ます計算を取り入れ、計算力の向上を図るとともに、児童の意欲、高まりを大切にした算数授業の工夫
・少人数指導やＴＴによる算数の授業の工夫と指導（1・3・4・５・6年）
・学習日記による児童の理解度、変容の把握及び次の指導への活用
・朝の全校読書
・倭学習（総合的な学習の時間）の充実

保護者・地域への協力・理解
・月１回の自由参観日 ‥‥取り組みの理解・協力
・夏季休業中の学習会 ‥‥学習の継続性の確認
・学校だより
・地区懇談会・ＰＴＡ総会での説明
・学校評議員会 倭地区教育推進懇談会

4　研究推進体制

研究組織図



Ⅲ　平成１５年度の成果及び課題

1　研究の成果

①　指導形態の工夫・改善

１年生では、少人数であることを生かして、学習の基礎となる字の書き方、ノートの使い方などきめの細かい指導に目を配り、個に対応した指導に重点を置き少しずつ定着してきている。

２年生、３年生、４年生では、児童の個人差に対応するため、ＴＴ指導を取り入れ、Ｔ１、Ｔ２の役割分担を事前に打ち合わせることで、机間指導や言葉がけなどをより効果的にできるよう心がけている。

５年生、６年生では、ＴＴ指導や習熟度別グループに分けるなど指導形態に工夫、変化をもたせている。特に、５年生では、均質な２グループで授業をしたり、基礎を中心に学習する「がっちりコース」、発展的内容を含む「はりきりコース」を事前に選択して学習したりする方法をとった。２グループに分けた場合、発言の機会が増え、質問もしやすく、行き届いた指導ができた。

②　授業改善（授業実践）

児童の興味・関心を喚起しやすい問題、児童が自力解決しやすい問題などを工夫した。５年生の「垂直と平行、四角形」の指導においては、『四角形を変身させよう』、６年生の「割合の表し方」においては、『おいしいカルピスの作り方を考えよう』などというように児童の興味を引くような問題を設定した。操作活動も取り入れることで、児童は意欲的に授業に取り組むことができた。

３年生の「水のかさのはかり方と表し方」では、いろいろな容器に水を入れて実際に測ってみるという操作活動を授業の中心において指導した。思考のきっかけを作る問題提示、問題を解決していくための手だてとしての操作活動を充実させることは、子どもたちの意欲ややる気を喚起することができた。

③　計算の習熟（百ます計算）

本年度も、学力の基礎となる読み・書き・計算を重視した。授業の導入時に百ます計算を定期的に取り入れた。学習の準備、身構えができるとともに、児童の計算力の向上、定着につながった。継続的に記録をとることにより、達成感が自信につながり、計算が好きな児童が多くなった。また、記録の蓄積、及び分析により、個に応じた指導が適切にできた。

④　学習日記

学習日記を本年度から取り入れた。毎時間の児童の授業に対する意識や理解度を把握するのに有効である。また、児童自身の自己評価は児童の課題意識を向上させている。今後、さらに継続し授業改善に生かしていきたい。

⑤　朝の読書

朝の読書を継続することにより、児童の本に親しむ習慣が定着してきている。

⑥　集団活動など、学校生活全体を通して

「学びの力」と「学び合う力」は、子どもの学校生活全体でつける力と捉え、学習活動の場と集団活動の場で一人ひとりの活動がお互いに分かると、より意欲的にがんばることができる。

毎週週始めの月曜集会、縦割り活動や集会活動などを通して、高学年の活動を低学年が受け継いだり、互いの活動を伝え合ったり、分かり合ったりすることができた。

2　今後の課題

①　指導形態の工夫・改善
　ＴＴや少人数指導を取り入れることで工夫・改善を図ってきたが、事前の打ち合わせ時間を十分に確保できないことが多かった。より効果的に個に応じた指導がなされるためには、事前の打ち合わせで、児童の抱えている課題の情報交換、授業のねらいの共通理解をはかることが、さらに必要である。また、授業中の支援のあり方としての、声のかけ方、机間指導の順序、指導者の立つ位置など具体的な支援の方法を工夫する必要がある。
　少人数指導においては、単元によって、より効果的な指導形態をＴＴ指導、習熟別グループ分けなど工夫する必要がある。

②　授業改善（授業実践）
　指導形態の工夫も、授業改善のひとつではあるが、どの授業形態をとるにしても、児童に魅力的で分かりやすく、追求心を喚起する教材や問題でなければならない。本年度、取り組んできた問題提示の研究でわかってきたことは、児童の思考を広げていったり、話し合いをする中で考えを深めていくことは少なかった。今後、思考や話し合いが広がり、深まるような問題提示の研究を進める必要がある。

③　計算の習熟（百ます計算）
　学年によって多少の差はあるが、どの学年も計算力の向上が見られた。今後も授業の中に位置づけて継続していきたい。児童の実態に合わせて、どの単元でどんな計算練習が効果的であるのか見極めていきたい。限られた授業時間の中で計算の習熟をはかり、当初の目的を達成するためには、各単元での綿密な計画が必要である。

④　学習日記
　１時間毎の授業を児童に振り返らせることは、指導者にとって、その時間の児童の理解度、心情を把握するのに有効である。問題は、時間が十分確保できないことである。授業計画の中に学習日記を書く時間を位置づける。また、低学年にとっては、書くことに抵抗感があるので、継続的な指導が必要である。

⑤　朝の読書
　取り組みも２年目となり定着してはいるが、児童の生活の中にどれだけ読書が習慣として入り込んでいるのかつかみかねている。継続することで、児童の本に対する意識の質的変化が生まれるのではないか。

⑥　集団活動など、学校生活全体を通して
　「授業でつけた力」を集団の場で発揮させられるよう、各学年に応じて指導をしていかなければならない。自分の考えや意見を言う場面で、相手を意識した発言になっていないことがあるので、授業での指導に力を入れ、発言する場を多くすることで、表現力を向上させる。

【新規校・継続校】　１４年度からの継続校

【学校規模】　６学級以下

【指導体制】　少人数による指導、Ｔ・Ｔによる指導

【研究教科】　算数

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　有

【特色ある取組事例として紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】
　「学習意欲の向上」について（当該校の研究実践をとおして）
　児童の学習意欲は、本来生まれたときから備わり、成長過程で個人差が現れ、その意欲も徐々に変化していくものであると言われている。
　また、学習意欲は、成長過程における周囲からの働きかけ（支援）によって、学習意欲の芽の成長が大きく違ってくると考えられる。幼児期での周囲の者からの刺激は、それ以降の興味・関心の持ち方に大きな影響を及ぼすものである。
　例えば、就学前の子どもの遊びや自然体験などが、「おもしろいから遊ぶ」「おもしろいから学ぶ」というように、学習意欲の源となって、学童期でのさらなる学習意欲に発展していくものと考えられる。
　当該校においては、児童の学習意欲を高めるという視点で教材の作成や指導方法や指導形態について工夫改善を行っている。、
　学習意欲の向上には、「共に学ぶ」という視点、つまり他人との協力や思いやる心などを大切にし、個人的な取組になりやすい「百ます計算」や「朝の読書」等「授業でつけた力」を集団の場で発揮できるよう工夫している。
　また、学習日記を活用する事により、自己分析を行い、さらなる課題や学習の興味へとつなげている。
　学習意欲の評価については、児童の発達段階も考慮し、より客観的な評価を行うために、児童の個性や自己評価等も含めた総合的な視点からの評価が必要であるため、今後の「学習日記」の活用についての研究を期待したい。